

〈研究ノート〉

姨捨山の屏風歌

西山秀人

姨捨山は『古今集』以来多くの和歌・俳諧に詠み継がれてきた信濃の歌枕であり、長野県千曲市と東筑摩郡筑北村にまたがる冠着山のこととされている。和歌用例の初出は、

(1)わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て¹ (古今集・雑下・878・読人不知)

であり、以後、月の名所として定着をみた。

(2)あやしくも慰めがたき心かな姨捨山の月も見なくに (小町集・96)

(3)見つつわれ慰めかねつ更級の姨捨山に照りし月かも (躬恒集・84)

(4)君が行く所と聞けば月見つつ姨捨山ぞ恋しかるべき (貫之集③・737)

(5)帰りけん空も知られず姨捨の山より出でし月を見しに

(後撰集・恋二・656・源重光)

などの後続詠は、いずれも(1)を踏まえたものとみてよいだろう。とくに(2)・(3)は姨捨山の月を見て心慰まぬさまを詠じている点、(1)の同工異曲ともいってよい。

また、(1)は『大和物語』156段で棄老説話と結びつけられ、姨捨という地名の由来として効果的に用いられている。すなわち、信濃の国更級の里に住む男が、妻にそのかされて年とった伯母を山に捨ててきたが、自分を親代わり育ててくれた伯母のことを思うと悲しくなり、山上に明るく照る月を見ながら(1)を詠じた後、再び山に行って伯母を連れ帰ったという話である。現在さまざまなスタイルで流布している姨捨伝説のルーツは、この説話に求めることができよう。

このように平安時代から人口に膾炙してきた姨捨山であるが、和歌や俳諧のみならず早くから絵画にも描かれていたことはあまり知られていないようである。以下、小稿では姨捨山を画題とした屏風歌・障子歌を取り上げ、当時の倭絵に描かれた姨捨山の姿について考えてみたい。

姨捨山を詠じた平安時代の屏風歌としては、次のようなものが指摘されている。

更級に宿りとりる旅人あり

(6)更級に宿りはとらじ姨捨の山まで照らせ秋の夜の月（忠見集・33）

姨捨山

(7)秋の夜の暁がたの月見れば姨捨山ぞ思ひやらる（信明集・33）

姨捨山に、月を望む客あり

(8)ひさかたの月は一つを姨捨の山からことに見ゆるなりけり（家経集・25）

(6)・(7)は天曆八年(954)に予定されていた村上天皇中宮穩子七十賀のために詠進された名所屏風歌とみられる²。穩子は同年正月四日、宮中の昭陽舎にて崩じたので、屏風自体は賀の儀式を飾ることはなかったが、その料歌は忠見・中務・信明の家集に残されている。かなり大規模な屏風だったようで、増田繁夫氏・小暮康弘氏は27の名所を四季ごとに配置していたと推測する³。姨捨山は秋の画題として選定されており、その絵柄は家永三郎氏によれば「姨捨山に照る月を望む人物を画いたもので、月次絵の月見図と全く同じ内容である」⁴とされ、増田氏は(6)の『忠見集』の題詞をもとに、「姨捨山の近くに宿をとらうとする旅人が、夜半の月を見て姥捨山の上で見る月を思ひやつてゐる」場面を想定する。

ちなみに、(6)の底本は西本願寺本であるが、冷泉家時雨亭文庫蔵「承空本私家集」(『新編私家集大成CD-ROM版』「忠見Ⅱ」所収)では題詞を「オハステ山ヲ、タヒ人コ^ニ」とする。これだと山越えをする旅人が姨捨山で月見をしている場面となるが、歌本文との整合性をいささか欠いているようである。「更級に宿りはとらじ」は、姨捨山の月を見るなら山麓の更級周辺では物足りないという旅人の心を表現したものと

考えたい。

(7)の信明歌については、増田氏が指摘されるように、屏風絵を鑑賞する立場での詠という解釈も可能であろう。仮に画中人物の視点に立っていたとしても、山中で月を見ているのではなく、麓から山中で見る月を思い遣った歌とみておくべきである。

以上より、当該屏風絵には、秋、麓の更級あたりから姨捨山に照る月を見遣る旅人の姿が描かれていたと推測され、おそらくは、

山の月

(9)草も木もみな紅葉すれども照る月の山の端はよに爰はらざりけり

(貫之集③347、承平八年[938]八条右大将本院北の方七十賀屏風歌)

と類同の構図ではなかったかと思われる。

(8)は家集では「ものにつくべきとて人の詠まする三首」と題する歌の一首であり、

逢坂の関に行く旅人あり、霧立ち渡る

(10)逢坂の行路も見えず秋霧の立たぬ先にぞ来ゆべかりける (家経集・23)

しかすがの渡に行く人立ち休らふ

(11)行く人も立ちぞわづらふしかすがの渡や旅の泊なるらむ (家経集・24)

に続くものであるが、(8)は『統詞花集』に「高倉一宮の草合の勝わざの事し侍りけるに、姨捨山に月を望人ある所に」(秋上・182)の詞書で収められている。高倉一宮とは後朱雀天皇第三皇女の祐子内親王のことであり、内親王が催した草合の勝態として、姨捨山の月見図に歌が添えられたのであろう。また、(11)は『金葉集』に「屏風の絵に、しかすがの渡行く人立ちわづらふかたかける所を詠める」(雑上・583)の詞書で入集しており、それらを勘案すると(8)はひとまず屏風絵を題に詠まれた歌とみておいてよさそうである。もっとも、草合の勝態としてわざわざ屏風が新調されたとは考えにくく、おそらくは既存の屏風絵を題に歌を付したという趣きであろう。

題詞の「姨捨山に、月を望む客あり」、歌本文の「姨捨の山から」(姨捨山という場

所柄) という記述からすれば、画面には山中で月を見る人物が描かれていたはずである。上掲(6)・(7)は麓から山上の月を見遣るという構図と思いが、(8)は、

屏風の絵に、山の峰にゐて月見たる人かきたる所に詠める 大江嘉言
(12)かご山の白雲かかる峰にても同じ高さぞ月は見えける (詞花集・雑上・302)

と類同の場面であったと推測されよう。同じ姨捨山でも、その描かれ方は家永氏の言う「月次絵の月見図と全く同じ内容」⁵ であるとは即断できず、少なくとも山麓からの月見図と山中での月見図の二つのパターンが存していたのではなからうか。

なお、家経と交友のあった範永の家集には、

題三、合坂関霧立有行客

(13)秋霧は立ち分かるとも逢坂の関のほかとて人を忘るな (範永集・95)

しかすが

(14)ふるさとは恋しくなれどしかすがの渡と聞けば行きもやられず (同・96)

姨捨山の月

(15)世に経とも姨捨山の月見ずはあはれを知らぬ身とやならまし (同・97)

の三首が収められ、おそらく上掲家経歌(8)・(10)・(11)と同時に召されたものと目される。とすると、(13)~(15)もまた屏風の絵を題とした歌作だと考えられよう。姨捨山題の(15)は、山中にて月を実見し得た喜びを逆説的に述べたもので、画中人物の視点からの詠と解される。

最後に『躬恒集』所載の一首について触れておきたい。

障子、題にしたがふ

(16)更級の山よりほかに照る時も慰めかねつこの頃の月 (躬恒集③179)

掲出本文は西本願寺本を底本とするが、歌仙家集本では「雑の歌、これもたいのおもむきによる」（『私家集大成』「躬恒V」）とあり、果たして障子歌か否か判然としない。内容的には叙景というよりも述懐の趣が強く、『新古今集』ではこの歌を恋部に入れている（恋四・1259）。現時点ではこれ以上の決め手がなく如何ともしがたいが、(16)が障子歌である可能性は低いとみておきたい。

【注】

- 1 以下、和歌の引用は、断りのない限り『新編国歌大観 CD-ROM版』（角川書店 平15）に拠り、私に表記を改めた。
- 2 増田繁夫氏「村上朝の名所絵屏風一屏風歌論二」（『人文研究』33巻1号 昭56・10）、小暮康弘氏「〔天曆八年（九五四）〕村上御時名所絵屏風歌（太皇太后藤原稲子七十の賀の名所絵屏風歌）」前・後（『群馬女子短期大学紀要』20・22号 平5・12、平7・12）、田島智子氏『屏風歌の研究』（平19 和泉書院）。
- 3 注2 増田氏・小暮氏論文。
- 4 家永三郎氏『上代倭絵全史 改訂重版』（昭21 高桐書院、平10 名著刊行会）。
- 5 注4に同じ。